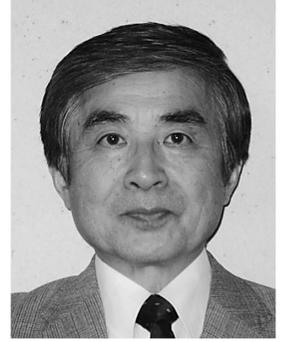


日本OR学会の3つの“務め”

OR学会会長：政策研究大学院大学名誉教授，同大理事 **大山 達雄**



日本OR学会は1957年の創立以来，来年で60周年を迎えようとしている．これまで本学会会長は学界人としての森口繁一教授，そして産業界人としての土光敏夫氏をはじめとして，学界，産業界の顕著な重鎮，大御所ともいべき人々が務め，学界と産業界を結びつける努力をしてきた．そのような中で私が学会会長を仰せつかることになった今，その責任の重大さを考えるに不安と緊張とを禁じざるを得ないというのが正直な心境である．本学会に対して私自身“在籍年数”は40年余となったが，これまで本学会に大きな貢献をしたという実績もなければ，自信も確信もない．森口繁一教授の指導を受けて修士課程を修了して以来ほぼ10年間を研究所で過ごし，その後は大学での教育，研究生活がすでに35年を迎えている．ただ言えることは，これまでの米国，中国，インドといった海外諸国でのORを通じた交流活動，そして国内においては大学での教育研究活動を通してOR普及活動に微力ながら努力をしてきたということかもしれない．

1950年代にORが“LP，PERT，シミュレーション”といういわゆる“3種の神器”として華々しく登場して世間の注目を浴びて以来，多くの学問的成果と共に顕著な発展を遂げてきていることは事実であるが，一方では，ORの理論と手法は学界，産業界を含めた一般社会に既にかなり普及し，日常化，一般化してきたと言えるのではなかろうか．これはむしろOR学会員としては歓迎すべきことと考えるべきであろう．このような中でORの存在意義，存在感，注目度をより高めようとするのは決して容易ではない．

私自身，これからの日本OR学会の“務め”として大きく以下の3つを果たしたいと思っている．(1) OR

の国内におけるより広範な普及の促進，(2) OR研究者の相互協力の推進，(3) 日本的ORの海外への積極的発信．(1)は，ORが日常化，一般化したとはいえ，まだまだ特に産業界における広範な普及といった点では未開拓な部分がかかなりあるはずである．より積極的な啓蒙活動，広報活動を通じてぜひ実現したい．(2)は，上記(1)の実現にとっても必要なことであるが，最近の研究の動向として研究者1人で研究成果を上げることは容易ではなくなりつつある．若手，中堅，シニアが協力し，場合によっては産業界を含めた協力体制に基づく共同作業が必要かつ有効である．このような活動によって有益かつ貴重な研究成果を上げたい．(3)は，ORの“定義”について，米国ではOperations Researchということで戦略重視，それに対してヨーロッパではOperational Researchということで考え方重視といったニュアンスの違いがある中，それらの中間的位置にあるとも言うべき日本的ORの成果をもっと積極的に海外に発信する必要がある．論文作成，国際学会発表等のあらゆる機会を利用してぜひ実現したい．私が学生時代に森口先生から言われたことで，「ORは物の見方，考え方である」がORを表す最も射した表現ではないだろうか．日本OR学会がこのことを肝に銘じて世の中にもっと貢献できたらと期待している．

私自身のつたない経験を含めて，思いつくままにいろいろと述べさせていただきました．日本OR学会員全員で協力しつつ，本学会のさらなる発展のために努力，そして貢献されるよう願っております．これから2年間，私なりに全力を尽くす所存であります．どうぞよろしく願いいたします．